

実体の区別とルーマンにおけるオートポイエーシス

下山 惣太郎

0. はじめに

本論文のなそうとしているのは、一言で言うならば社会学者として知られるニクラス・ルーマンのシステム論と言われるものを哲学として有用な実体論として読む試みである。ただし、この試みは単に従来指摘されてこなかった共通点を指摘するというようなものでも、またとりあえず関係ないものを見比べて類似点と相違点を探る、などというようなものではない。本論文が目指すのはルーマンの議論が哲学における一定の領域での議論の延長線上にあるというものとしてルーマンの主張を読むことであり、またそうしたルーマン読解が哲学の議論に寄与するということを主張することである。

これを踏まえ、第 1 節ではまずルーマンの方針について確認する。ここではルーマンの書いたものに沿って、彼が一体どういったことを目指していたのかをはっきりさせたい。これを明らかにすれば、目的意識が同じかあるいは近くにある研究がどのようなものであるかが分かるということになる。これによってたとえば、ある哲学における研究の目的がルーマンと一致することを示し、ルーマンを哲学的議論の俎上にのせる、などといったことが可能となる。

第 2 節では実体論を取り扱う。ここでは本論文で取り扱う実体論とは具体的にどういったものを想定しているのか、ということを示す。そしてそれを通じて、第 1 節で確認したルーマンの方針との関連について考える。ここで、第 1 節でなされた解釈で読まれたルーマンのシステム論が哲学と社会学にまたがる学問領域のどんな場所に位置づけることができるのかが分かるだろう。その結果、ルーマンのシステム論は実体論として読まれうるし、またそれが第 1 節で述べたルーマンの方針にかなったものだということが導かれる。

第 3 節では、従来の実体論において問題として提示されてきたものの一部を、

特に現代のアリストテレス研究周辺の哲学に注目して紹介する。その問題とは、実体が他の実体でないといわれるもの(たとえば属性など)と区別がつかないのではないか、たとえ区別ができてその身分の違いについてしっかりとした説明はできないのではないかというものである。

第4節では、第3節で述べられた問題点はルーマンのシステム論においては解消されていると主張することで、ルーマンの議論の実体論における意義を述べる。ここではルーマンの主張を追っていくが、そこでオートポイエーシスという概念に行き当たる。このオートポイエーシスこそが実体と実体以外のものを区別する鍵になるというのが本論文の主張である。これを通じて、当初の目的であるルーマンのシステム論を意義のある実体論として読む可能性を示せるだろう。また同時に、第1節で述べたルーマンの方針に沿った研究の一例となるはずである。

1. ルーマンの方針

『社会の社会』第1章第2節では、ルーマン自身が自らのとる方針について詳しく語っている。

ここでルーマンは次の二つの社会学における研究のやり方、立場と自分は距離をとる、と宣言している。一つは何が生じているのか、あるいはその背後には何が潜んでいるのかを明らかにする研究であり、もう一つはいわゆる社会学の《経験的》研究、あるいは実証的な社会学である。

前者はルーマンが別のところでも述べているように¹、事実としてそこにある社会的リアリティについて考えるというものである。自然科学が現にある物理的な現象を事実として観察し、その背後に潜む運動の規則を明らかにするというと同じようなことを組織やコミュニケーションといった現にある社会的に構成されている現象、すなわち社会的リアリティに対して執り行うこと、それが社会学の目的であるという立場である。この方針をとっているのはたとえば批判的 sociology である。批判的 sociology は敵対者の見解を自らの基準で評価するという形でなされており、研究の前から判断が固まっているという問題点がある。あるいは現にある社会秩序をかつては闘争状態であり国家秩序などはな

かったが、契約によって今のようになったなどと考察する立場もこれに含まれるだろう。というのも、こうした立場もまた現実社会という社会的リアリティと、その背後にある契約という図式で社会を説明しようとしているからである。その他、単に現に起こっている現象を都合のいいモデルによって説明しようとする試みもまたこうした立場に含まれる。

もう一方の経験的研究ということで言われているのは研究者という主体の経験から出発して存在に到達するように試みる研究である。経験的研究には自身の経験に踏みとどまるものだけではなく、大量の経験からマクロな社会現象を把握するといったものも含まれる。これはたとえば犯罪率や移民、離婚率の問題などである²。経験的に犯罪、移民、離婚の事例を集めることでよりマクロな現象という存在がどうなっているのかに到達することができる、という立場がここで言われているのだろう。しかしここには経験とリアリティの一致を経験的に確認しなければならないという問題点が含まれている。さらにたとえそうした経験的研究から確実な知識が得られるとしても、そうした知識の効力は社会の変化によって簡単に失われてしまう。

ではこうしたものに反するルーマンがとる立場とはどういったものなのだろうか。ルーマンはこの二つの立場は欠点があるが、拒絶するべきものではなく補完されなければならないと述べている³。経験的研究は〈なぜ現にあるようにものごとはあるのか〉という問いを促す。恐らくルーマンの力点はここにある。ルーマンがこの二つの立場の説明の後に自身のとる方法として述べるのは機能的比較の方法⁴であるが、それは次のような結果を導き出す。

今や「全体社会が、自ら満たすことのできないような理念を抱え込んでいるのはなぜなのか、またその種の理念をどうやって選択するのか」と問われなければならない。それに換えて、研究の対象とされた諸状態が全体社会によって条件づけられているということを次のようにして証明することもできるし、またそうしなければならないはずである。⁵

この引用にある全体社会とは、日本社会やアメリカ社会などとは違って、すべてのコミュニケーションを含む社会のことである。ここで言われているのは

〈ある理念がある〉から〈全体社会はある理念をなぜ持っているのか〉への転換、あるいは〈ある諸状態がある〉から〈ある諸状態は全体社会によって可能となっている〉への転換である。言い換えれば従来それが確実にあるとして考えられてきた社会的リアリティに対し、それがなぜあるのか、どうしてありえているのかという可能性の条件を問うということがルーマンのとらえようとする立場であるということだろう。とすればルーマンの研究は上に挙げたような他の社会学における研究と横並びのものとして考えるのではなく、可能性の条件を問うということを問題にしてきた他の研究と並べるとするのが真剣に検討されるべき考え方だろう。そしてこの問題意識は哲学と非常に親和性が高い。もちろんここでいう哲学とは現実にはなにがあるのかということを問う、ルーマンが言うところの旧ヨーロッパのゼマンティックとしての存在論ではない⁶。そうした研究は今の文脈で言えばむしろ批判的 sociology や経験的 sociology と並べられるべきものだろう。問題となるのは存在について問う研究ではなく、存在の可能性の条件について問うような哲学の豊富な知見である。今まで述べたようなルーマンの方針に従って研究するということは、このような哲学との関連から（そしてもちろん可能性の条件というポイントを注視しながら）社会というものを記述していく、という作業になるだろう⁷。

2. 実体

本節ではルーマンのシステム論と哲学には緊密な関係があり、そしてその関係とは具体的にどのようなものか、従来の哲学のうちのどのような位置にルーマンのシステム論は位置づけられるのかということを示すために、まずは実体について考えたい。というのも、哲学における実体論とは第1節において述べたルーマンの問題意識と深く関わるものであるからだ。

あるということ、存在ということが何を意味しているのかということについて考える時、そこには二つの意味があるだろうとアリストテレスは述べた⁸。一つはものが何であるのか、ある個物があると言われる時その個物とは何なのか、という場合の「ある」である。もう一つはどのようなものがあるか、どのくらいのものがあるかという時の「ある」である。ここにミケがある、と言わ

れる時の「ある」とここにいる猫は三毛猫である、と言われる時の「ある」をアリストテレスはここで明白に区別しているのだ。この時前者のような仕方であるものが実体 (ousia) である。

第一にあるものは、すなわち、或るなにかであると言われるものではなく、端的にあると言われるものは、実体であるにちがいない。⁹

ここで重要なのは、実体はなにかの特徴や性質ではないものとして考えられているということである。むしろ実体とは特徴や性質が属する基体であり、それらとは本性を異にする。アリストテレスはここでいう「第一にあるもの」について詳述している。それをまとめて言えば「その他のものどもがこれに依存しこれによってそう呼ばれ理解されるどころの第一のもの」¹⁰ということになるだろう。たとえば赤いという性質は、なにか他の基体に属するものとしてでなくては理解できない。赤いという性質がある時、たとえばりんごのようなその性質が属する先である基体が必ずなければならない。この時赤いという性質は他のものに依存しているということが出来る。こうした議論に従いアリストテレスに沿って言うならば、他のなにかに依存せずそれ自身によって理解されるもの、そして他のものがそれに依存し、それによって理解可能になるようなものについて論じるならば、それは実体について論じているということになる。

そしてこの実体についての考え方はアリストテレス以後も引き継がれていったと考えていいだろう。デカルトが神を無限実体と考えたのはそれ以外の何ものにも依存しないからであり、物体と精神はそれぞれ神以外のものには依存しないという意味で有限実体と言われる。またスピノザ『エチカ』第1部定義3では「実体とは、それ自身のうちに在りかつそれ自身によって考えられるもの、言い換えればその概念を形成するのに他のものの概念を必要としないもの、と解する」¹¹とされている。

これは現代でも同様の使われ方がされている。たとえばロウは実体の定義をする時に「x が実体であるのは x が個物であり、かつ次のような個物 y、すなわち x と同一ではなく、x の同一性がその同一性に依存するような個物 y が存在しない時であり、またその時に限る」¹²と述べている。ここでもやはり他の

ものに依存していないということが実体の主たる条件として扱われているのである。

このことから以下のことが分かるだろう。すなわち、このようなアリストテレスの流れを汲む実体論は、他のものを依存させるもの、言い換えれば他のものが存在するための条件になっているものに関する議論である。つまり何が実体に相当するのか、ということについての議論は、なにかの存在の可能性の条件を問うていることに他ならない。このことから第1節で述べたルーマンの方針と、それが社会を重要なものとして扱っているかどうかという違いはあるが同じ関心の下にあるとっていいだろう。そのため実体論との関係においてルーマンのシステム論を位置づけるということは、社会的なものの可能性の条件を問うというルーマンの取り組んだ研究を前進させることにつながる。実体論が可能性の条件を問う対象はありうるもの一般だが、そこにはもちろん社会が含まれているという点でルーマンの研究になんらかの示唆を与えるものに違いない。そして逆にルーマンの研究を実体論として読めば、現状問題になっている実体についての問題の解決のために新たな視点を持ち込める見込みがあるということはここまでで十分に言えよう。

というわけで、本節の目的はルーマンのシステム論がこうした議論の延長線上にあることを示すことにある。この問題はルーマンが述べている自己準拠システムがアリストテレスの言う意味で実体にあてはまるということが言えるならば満たされるだろう。

システムとは諸要素と要素同士の関係の集合のことを指すが、自己準拠システムとはそうしたシステムの中でもある特殊な性質を持つものである。ルーマンによる自己準拠システムの定義は次のようになっている。

あるシステムを自己準拠的システムと言い表すことができるのは、そのシステムが、そのシステムを成り立たせている諸要素をしかるべき機能を果たしている統一体としてそのシステム自体で構成しており、と同時に、こうした諸要素の間のすべての諸関係が、こうしたシステムによる要素の自己構成を手がかりとして (*auf diese Selbstkonstitution*) 作りあげられており、したがって、こうした方法により、そのシステムはみずからの自己構成を

継続的に再生産している場合である。¹³

ここでは自己準拠システムは自らの構成を自らによって生産しているということが言われている。ではこの自己生産はいかにして行われるのか。それは境界の産出によって、である。自己準拠システムは要素の生産という自らの作動によって差異を生ぜしめる。そしてその差異は自らとそれ以外を分ける。ここでルーマンがしばしば引用するスペンサー・ブラウンの定式が効いてくるのだが、すべてのものは区別(Unterscheidung, distinction)と指し示し(Bezeichnung, indication)によってしか現れえないのである¹⁴。Aはそれがなんであれ、非Aでないことを含んでいなければならない。非AであるAなど考えられないからだ。つまりすべてのものは、そうでないものとの差異があるからこそ定立している。この差異は区別であるが、区別だけではAと非Aは対称である。しかしAがある、というようにAが扱われている時、必ずAは非Aと非対称である必要がある。Aがあると非Aがあるは等価ではないからだ。この時Aの側に焦点が置かれることを指し示しと呼ぶ。つまり区別されないものはいかなる意味でも無いものと同じであるし、指し示されないものはいかなる意味でも扱うことができない。つまり差異の産出とは取扱い可能な一つの個体である自己の産出に等しいのである。

とすれば、システムの内部に属するものがすべてシステムに依存しているということが分かるだろう。システムの内部に属するものには要素とその要素同士の関係があるが、どちらもシステムによって作られるものである。まずこの意味で、システム内部のものはシステムに依存している。システム内部のものはシステムがなければ現れなかったし、それがどういったものなのかということは構成したシステムが規定しているのである。そしてそうした原因に関することだけではなく、現にシステム内部のもののみではそれは存在しえないという仕方でも要素と関係はシステムに依存している。なぜなら要素と関係は一旦構成されれば独力で存在し続けることができるというものではないからである。システムは自己を再生産し続けるが、システムが個体であり続けるのはその限りにおいてのみである。つまり個体はただ一回の区別と指し示しがあるというだけでは非常に不安定なまま消滅する。要素と関係も同様であり、常に規定さ

れ続けるという作動が必要である。かつそれはシステムによってしかなされない以上、その存在に関してはいかなる意味においてもシステムに依存していると言わざるを得ない。

さらにシステムの外部についても同じことが言える。というのは上述の通りシステムの自己再生産とは境界の生産である以上、システムが作られるということは同時にシステム以外のものが作られるということの意味しているからである。まったく同様にして作られるということはシステム内部についてと同じ議論ができるということであるから、つまりシステムはシステム内部にとってもシステム外部にとってもそれがなければ存在しえなかったものとしてあるのだから、システム外部もシステムに依存していると言っていいだろう。

以上より自己準拠システムにその内外のものすべては依存している。さらに上記引用部にあるようにシステムは自分自身を自己自身によってのみ作るのだから、システムは自己自身にのみ依存しているということになる。つまり、ルーマンにおける自己準拠システムは実体である。

3. 実体の区別

第2節まででルーマンの方針に従って研究を前進させるため、哲学とシステム論に接点を作ることを試みた。しかしこのままでは、確かに今後の検討次第で社会の可能性の条件に関する研究になんらかの進展を与えることができるかもしれないが、哲学からしてみれば実体の見方の亜流が増えただけで特にルーマンを持ち出す意義はないということになるだろう。そのため第3節と第4節ではルーマンのシステム論が実体論として特異であるということを示したい。そのために、この節では現状の実体に関する議論のうち一つの問題をとりあげる。

現代哲学における実体に関する議論では、実体とそれ以外との区別が一つの大きな問題になっていると言えるだろう。たとえばマッキーがこれを指摘している¹⁵。それは何が実体であると言えるかが曖昧であるという指摘である。これは言い換えればあるものが他のものに依存しているとはどういうことか、という議論でもある。もしそれがなければあるものは成立しえなかっただろう、

という場合、そのあるものは実体であるとはいえない。ところで複合的なものはすべてその要素がなければ成立しえなかつたと言える。家は屋根がなければありえないし、屋根は瓦がなければありえない。そのような意味で家も屋根も実体とは言えない。これはそれを構成するより小さい部分を指摘すれば実体であるとは言えなくなるということなのだから、なにも実体とは言えなくなってしまう。しかしそれを成立させている根源的なものは、それが成立している以上なければならないのである。

マッキーの議論はなにを实体と言えるのかが分からなくなるという困難を指摘したもののだが、仮にそれを示せたとしても問題は明らかにはならない。先ほども述べたように、ロウは実体を同一性の観点から定義しようとした。この場合、あるいはマッキーの問題は克服できるかもしれない。というのは、あるものの同一性がその構成要素の同一性に必ずしも依存しているとは言えないかもしれないからだ。ロウは同一性について、必然的に x が y の変化に関連して変化するという関係が x の本質の一部になっていると言えるような関係が存在する場合、 x の同一性は y の同一性に依存すると考えていた¹⁶。だが全体がその構成要素が変化しようとも変化しないということはある。たとえばある文が書かれていたとして、その中の一文字一文字は構成要素だと言える。マッキーの考え方によれば構成要素である文字が少しでも異なれば文は成立しなくなるのだから、文は文字に依存しているということになる。しかしロウの見地に立てば異なった文字を用いて同じ文を作ることは可能であるから、文の同一性は文字の同一性に依存していないということになる。しかしロウは自身の議論に対して次のような反論が考えられると言っている。すなわち、実体をその同一性によって定義した場合、実体と実体の本質的な性質との関係がどのようになっているかを説明できないのではないかというものである¹⁷。つまり、本質的な性質は本質的なものだから実体の構成になんらかの形でかかわっているように思えるが、ロウの議論では本質的な性質を持ち出さなくても実体を説明できてしまうという反論である。これに対しロウは、実体と実体の本質的な性質は同一であると答える。しかしこの主張はあまり受け入れやすいものではない。実体と性質が同一であるとはどういうことなのかということについては多くの議論がある。実体と性質が存在として同じものなのか、実体が性質を代表する

ものなのか、その関係については決して明確ではない。

ホフマンとローゼンクランツも実体と性質の関係に関してロウと対立する論者である。彼らによれば実体と性質はその数によって区別することができる。一つのものについて考える時、実体は必ず一つしかないが性質はたとえそれが実体に本質的なものであったとしても複数あるということによって、彼らは実体と性質を区別しようとした¹⁸。実体は個体なのだから、複数の実体は別の個体を構成することになる。つまりある個体について実体は必然的に一つである。しかし性質は他の性質を必然的に含意する。赤いという性質は色があるという性質を含意しているし、色があるという性質はなにかしらの具体的な色に関する性質をそれが持っていることを必然的に含意する。そのためあるものに関して性質は複数なければならず、この点で実体と性質は区別されるという議論である。

しかし問題はそれだけでは解決しない。たとえ実体と性質を区別できたとしても、その区別のされ方にはまだ疑問が残る¹⁹。実体と性質の違いが数という点にのみあるのだとすれば、実体と性質が各々物質として与えられるということに関しては異論がないところだろう。たとえばりんごが実体であるとしたら、それが赤いというのは性質であり、この二つはどちらも物質的に与えられている。ではその二つを決定的に分けているものは何なのか。どちらも物質的な特徴であるということなら、性質は実体の部分であるということになってしまうだろう。そうすると、その部分を全体として見れば性質はまた実体にもなりうるということになってしまう。実体と性質の間の越境しがたい違いは、少なくともその二つをあるものに対してそれがいくつあるかという数の問題に帰してしまっては説明がつかない。

実体とはなにかという問題について、本論文では以上の問題点について考えてみることにする。

4. 実体論におけるシステム論の可能性

第3節で提示された問題についてもう一度整理してみよう。まず問題にあったのはなにが実体であるといえるのかについてだった。あるものが他に依存

しているのか否かは決して明瞭ではない。このことは実体とそれ以外、たとえば本質的な性質とを区別することができるのかという問題につながる。さらに、たとえこの点が解決されたとしても実体と実体以外のものはどういった点で決定的に異なるのかを示すことも難しいということが問題点として挙がっていた。

本節で示されるのはこうした問題をクリアするような実体のあり方をルーマンは提示しており、それを通じてルーマンはこれらの問題に一定の解決法を与えているのだ、ということである。

第3節で述べたように、システムが他に依存していないと言われる時に重要なのは境界の産出であった。これだけを見る限りでは、それは別段新しい主張ではない。というのも、ある個体が個体であるからにはその個体と他の物とが分けられる場所がなければならぬからである。しかしルーマンが心や社会をシステムとみなしていることから分かるように、この境界は物理的に与えられているような境界ではない。ということは依存している／依存していないということを考えるにあたり、ルーマンはそれを物理的な構造や組み合わせではないものとして考えているということになる。これは一体どういうことであり、そしてそれは果たして妥当な考え方なのか。

これを明らかにするには、ルーマンの言うオートポイエシスの意味について考えるのがいいだろう。我々は通常多くのものを個体として考えている。たとえば人間という一つの生命体について考えてみよう。我々は人間を一つのものとして見ることができるが、しかしそれは簡単な話ではない。切られた爪や切り落とされた指、消化されつつある食べ物のことを考えればどこまでが人間なのかは非常に曖昧であるといえよう。この時、我々は何を個体と言っているのだろうか。どこまでが人間であると言えるのか。少なくともこのような意味で把握される限りにおける生命体としての人間は実体とは言えない。なぜなら上に見たように実体とはそれが成立するための条件となっているものが自己以外のものかどうかで判定できるのであり、人間という個体は、それがどうとらえられるとしてもそれを個体として成立させる作用に依存していると考えられるからだ。ここから分かるのは、一つの個体は確かに物質的に見れば部品である要素に依存しているとも言えるかもしれないが個体の成立ということに関して物質的な要素は重要な位置を占めていないということである。たとえば神が

自分の似姿として人間を作ったと言われる時、神は人間を個体として作ったということだと考えられる。そしてこの時人間が人間であるのはそうした神の創造の作用なのであって、人間がどんな物質によって構成されているかということとは関係ない。

オートポイエーシスはこのような文脈で考えられる。オートポイエーシスとはシステムにおける要素の産出がシステムの外部からの影響を受けない、という事態のことを指すものであるが、これについてももう少し詳しく見てみよう。ルーマンは生命体としての人間をオートポイエーシス・システムだと認める。その理由は、人間が人間を個体として成立させているからである。それを個体にせしめる原因が自らにあるならば、それは自身の成立を他に依存していないという意味で実体ということができるだろう。ではどのようにしてか、それは人間は、新たに細胞を作り出すことを通じて人間としての統一体を再生産しているからである。ルーマンはこれをシステム準拠(Systemreferenz)と呼ぶ²⁰。これは言い換えれば、要素がシステムとそれ以外の境界を示し、要素自身はシステムに含まれるという形で要素が生産されることである。新たに生み出された細胞は、自らが生命体の一部となり、他の細胞と生物学的な特殊な関係を取り結ぶことで生命体とそれ以外を区別する。この時その特殊な関係は、関係を取り結んでいる細胞が生命体の外側ではなく、他でもないその生命体の一部と化しているということを意味しているのである。こうして生命体は他のものに依存することなく自分自身を構成する。

自動車を考えてみよう。自動車はオートポイエーシス・システムではない。なぜなら自動車は新たに自分の要素を生み出さないし、普通は自動車の要素とみなされるもの同士は周りの物体との関係と地続きである物理的な関係によってつながっているからだ。そのため、自動車は周りのものの影響を物理的な関係を通して直接受けることになる。しかしひとつの生命を維持する有機物やひとつの心を形成する諸瞬間の意識によって生み出される各々の位相空間(関係を含む要素の集合)は、その位相空間外のものの影響を決して受けることはない。なぜなら境界の再生産によってシステム内部の特殊な関係とその他の関係が切り分けられるからである。心を例にとると分かりやすいだろう。一つの心に属する意識は、どの瞬間の意識をとってみてもある個人の意識であるという形で

特殊な関係を築いている。言い換えれば一つの心に属する意識同士の関係は、それ以外の関係からは明確に区別されている。物理的な攻撃が痛みを感じるという意識を生んだとしても、あるいは社会的なコミュニケーションによって感動が与えられたとしても、心においてはそうした影響は意識という形でしか現れない。つまり物理的あるいは社会的な関係とは地続きではない、意識の連鎖という独特の関係のみが心的システムでは生じるのである。ここに作動上の閉鎖が見られる。作動とは一つ一つの細胞や意識といったシステムの要素のことであり、作動上の閉鎖とはそのような要素の関係が他の関係からの影響を決して被らないような独特の位相空間を作り上げているということである。そしてこの閉鎖のことをルーマンはオートポイエーシスと呼んだ。そのためオートポイエーシスを形成しているシステム(=オートポイエーシス・システム)は正確な意味で、他に依存しない独立性とすべてのもの、すなわち境界の内側と外側を依存させる境界決定という力を持っているのである。ここで注意すべきことは、ルーマンの言う境界は作動上の閉鎖との関連においてとらえられるべきであり、物理的な境界を考えてはいけないということである。たとえば生命体と細胞はそれぞれシステムであるが、細胞は物理的に生命体に含まれる。しかしこれはシステムの水準において生命体が細胞を含んでいるということの意味するのではない。生命体と細胞はそれぞれ独立した実体であり、それが全体と部分の関係にあるというのは、(たとえば社会システムなどにおいて)物理的な関係からそれを記述した時に初めて言われることなのである。それは決して、細胞が自己の内部で独特の関係を取り結んでおり、自己と自己以外の境界を継続的に再生産しているということを否定するものではない。

以上のことを考えれば、第3節で挙げられた問題はルーマンの実体論においては問題にならないことが分かるだろう。まず何が実体になるのかという問題だが、ルーマンにおいてはオートポイエーシスを形成しているものが実体であるということになる。上に見たように実体はその要素に依存していることにはならないから、真に実体と言えるものはその要素であるということによる無限後退は生じない。また実体とそれ以外はオートポイエーシスを形成しているかどうかで明確に区別できるのだから、その区別が曖昧であるということが問題になることもない。特にシステムは自己同一性を自身によって確保するのだから

ら、自身に関わる全ての性質もまた自身によって生産されるものと考えられる。この点で実体と性質の区別はルーマンにおいては明確である。最後に実体とそれ以外がどのように違うのかという問題に関してだが、ルーマンによればシステムはその要素と関係の集合である²¹。しかしそれは要素や関係が見方を変えれば実体になるような仕方ではない。そこには境界を再生産する能力を持つものと持たないものという機能上の違いがあり、要素はそれ単独では個体になりえないという大きな立場上の違いがある。

註

1. Luhmann, N. *Was ist der Fall? und "Was steckt dahinter?" Die zwei Soziologien und die Gesellschaftstheorie.*, Bielefeld, 1993.
2. Luhmann, N. *Die Gesellschaft der Gesellschaft*, 1. Aufl, Frankfurt am Main, 1998, S. 29.
3. ebd., S. 30.
4. Luhmann, N., "Der Funktionsbegriff in der Verwaltungswissenschaft", *Verwaltungsarchiv* 49, 1958, S. 97-105. に詳しい。機能とは複数の可能性が等価であるということを規定する図式であり、たとえば空と堇は青いという点では機能的に等価であると言える。ルーマンは一見まったく異なる事柄が別種のシステムにおいて等価な役割を担っていることを指摘することで機能比較を行うが、こうした研究の方法をここでは機能的比較の方法と呼んでいる。
5. ebd., S. 31.
6. ebd., S. 893.
7. これについてはなぜ主な対象を社会に設定すべきなのか、という問題が残るだろう。問題意識を同じくしていた従来の哲学者は特に社会を注視せずに扱えるものとみなしてきたからだ。そのためルーマンにおいて現にあるものの可能性の条件を問ううちに社会というものの重要性がいかに立ち現れてくるかということを述べる必要があると思われるが、本論文ではこの問題については扱わず、今後の課題としておきたい。
8. Aristotelis, *Aristotle's metaphysics*, Oxford, 1924, Z 1. 1028a10.
9. Ibid., Z 1. 1028a 30.
10. Ibid., Γ 2. 1003b 17.
11. Spinoza, Benedictus de, *Éthique*, Paris, 1988, 第 1 部定義 3.
12. Lowe, J., *The Possibility of Metaphysics: substance, identity and time*, Oxford, 1998, 151.
13. Luhmann, N. *Soziale Systeme*, Frankfurt am Main, 1987, c1984, S.59.
14. Spencer-Brown, G., *Laws of form*, London, 1969, 1.
15. Mackie, P., "Review of Hoffman and Rosenkranz", *Mind*, vol. 109, 1994, 149-152.
16. Lowe, J. [1998], op.cit., p.149.
17. Ibid., ch. I.
18. Hoffman, J. and Rosenkranz, G. S., *Substance Among Other Categories*, Cambridge., 1994, 126.
19. Robinson, H., "Substance", *The Stanford Encyclopedia of Philosophy* (Summer 2013 Edition), Edward N. Zalta (ed.), forthcoming,

URL=<<http://plato.stanford.edu/archives/sum2013/entries/substance/>>.

²⁰ Luhmann[1987 c1984],a.a.O.,S.32.

²¹ ebd.,S.59.

参考文献

Aristotelis, *Aristotle's metaphysics*, Oxford, 1924.

Descartes, R. , *Meditationes de prima philosophia*, Paris, 1996.

Hoffman, J. and Rosenkranz, G. S. , *Substance Among Other Categories*, Cambridge. , 1994.

Lowe, J. , *The Possibility of Metaphysics: substance, identity and time*, Oxford, 1998.

Luhmann, N. , “ Der Funktionsbegriff in der Verwaltungswissenschaft”,
Verwaltungsarchiv 49, 1958, S. 97–105.

—, *Soziale Systeme*, Frankfurt am Main, 1987, c1984.

—, *Was ist der Fall? ” und “Was steckt dahinter? ” Die zwei Soziologien und die Gesellschaftstheorie*, Bielefeld, 1993.

—, *Die Gesellschaft der Gesellschaft*, 1. Aufl, Frankfurt am Main, 1998.

Mackie, P. , “Review of Hoffman and Rosenkranz” , *Mind*, vol. 109, 1994, 149–152.

Robinson, H. , "Substance", *The Stanford Encyclopedia of Philosophy* (Summer 2013 Edition), Edward N. Zalta (ed.), forthcoming,

URL=<<http://plato.stanford.edu/archives/sum2013/entries/substance/>>.

Spencer-Brown, G., *Laws of form*, London, 1969.

Spinoza, Benedictus de, *Éthique*, Paris, 1988.

